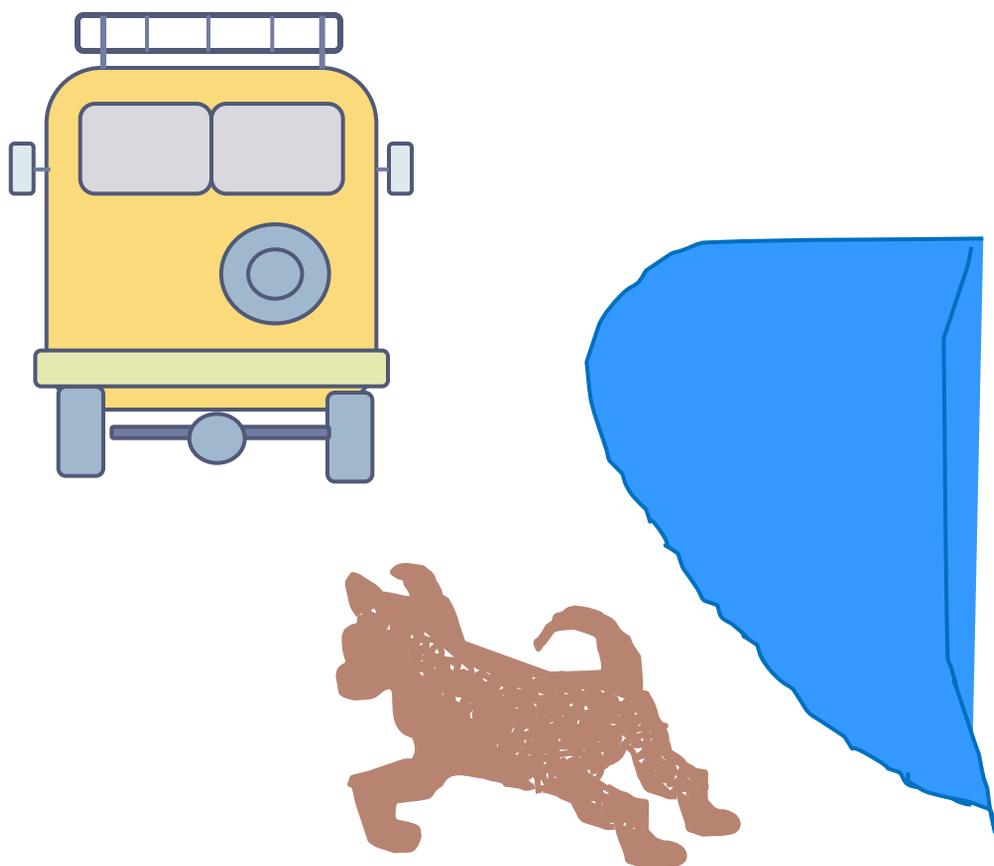


めい けん
迷犬アカの物語
—動物から教えられたこと—

作 吉田嗣郎（秦野のホタルを守る会長）

◆再び会長になったことを機に「ほたる便り」第14号…1986年発行に掲載された、犬との稀有な体験を復刻しました。

*この物語は本当にあったことです、私がカメラマン助手として仕事をしていた27歳の若き日の体験です。



◆ **秦野のホタルを守る会**
—きれいな水と緑を未来の子供たちへ—

I アカとの出会い

昭和41年（1965年）夏、私は「海の生物詩」と言う記録映画35mmの撮影のため、和歌山県白浜温泉にある、京都大学白浜臨海実験所に長期滞在していた。

私はこの仕事のため、潜水士の免許を取っていて、毎日のように黒潮洗う南国紀州の海に潜り、腔腸動物の生態の撮影を手伝ったり採集して水槽で飼育する仕事をしていた。腔腸動物とはイソギンチャクやクラゲの仲間のことで、ハネガヤやイソバナのように、一見植物のように見えるものから、造礁サンゴ類のように大きな群体を作るものまでさまざまな種類がある。



- ◆腔腸動物の一種イボヤギに寄生するツバメガイ。このロケの時に採集したもの。水深15mまで素潜りし採取した。紀州白浜、1967年7月、水深15mなどの文字が見える。若く元気だったので、石を持って潜り、上がる時は捨てて一気に水面に上がった。

初めて潜水して見る水中の世界には多様な生き物が住んでいて、それぞれが美しく、生態は驚きに満ちていた。この仕事のおかげで、海の生物の素晴らしさを肌で感じる事ができた。この映画のスタッフは、カメラマン志望の駆け出しの私と、師匠である監督兼カメラマン（叔父）の二人で、実験所から3Kmほど離れた、海辺に建つ民宿に泊まっていた。仕事場への行き帰りは新型のジープで通っていた。朝8時頃宿を出ると、昼間は生き物の撮影や潜水して腔腸動物を採集、夜は、採集した生き物を水槽に移して飼育し生態を撮影した。仕事を終えて帰るのはいつも深夜になった。



- ◆潜水士の免許、現在のようにスキューバダイビングはまだ盛んでなく、ダイビングショップもなかった。

そんな毎日が続いたある朝、車の下に赤っぽい茶色の中型犬が寝ているのが目に入った。私が車の下を覗くと犬はこっちを向いた。目はやさしくおびえた様子はなかった。首輪はなくやせていて、一見して野良犬であることがわかった。私はそれまで犬を飼ったことはなく小学生の頃、親戚に使いに行ったときによく犬に吠えつかれ、犬は好きではなかった。しかしこの犬はなにか優しい雰囲気をもっていた。

私は車を出すとき、轢かれないようにと犬に声をかけた。「ほら、危ないよあぶないよ、あっちに行きな…」という、犬は車の下から出てトコトコと波打ち際の方に行ってしまった。これがこの犬との最初の出会いであった。

この犬はそれから毎日、駐車している私たちの車の下で寝るようになった。私は車を出すたびに「危ないよ出なさい、出なさい…」と声をかけることになった。

II アカの冒険

この犬が車の下で寝るようになって一週間ほどたったある朝、いつものように車の下から犬をどかせてから車を出した。海岸沿いの清々しい道を実験所に向かって走った。しばらく走ってふとバックミラーを見ると、あの犬が一生懸命この車を追いかけてくる姿が目に入った。私は一瞬はっとして、車のスピードを落とし犬がついて来られるようにした。3Kmあまりの道を走りぬいて臨海実験所に着いたとき、よく追ってきたね、と犬の頭を撫でてやった。犬はそうされてもまとわりつく訳でもなく、とことこと海岸の方へ行ってしまった。

私はスキューバダイビングの準備をしてウエットスーツを着た。水中メガネとシュノーケルを付けて海に入った。そのとき犬は海岸で遊んでいたが、私の姿を見つけると走り寄ってきた。そして水際までくると困ったように「ヒーヒー」と鼻を鳴らした。私はかまわず50m程の先の岩場に泳ぎ渡った。岩場に上がって振り返って犬を見ると、犬は私の方に来たくて仕方がないという風に、行ったり来たりしていたが、そのうち意を決したようにジャブジャブと海に入り始めた。そして背が立たなくなると、あの犬かきでとうとう泳ぎ切って、私のいる岩場に上がって来てしまった。私は感動で息苦しいような思いをしながら、何度も濡れた犬の頭をなで体をさすった。



私はこの犬と出会ってからこれまで一度も餌をやらなかった。ただ車の下で寝ている犬を、邪険に追い払ったりしなかつただけだ。なのに犬は私の心に答えて次第になついてきたのだった。私はそれまで、犬や他の動物は餌を与えるからなつくのだと思っていた。この信じられない体験をしてからは、その考えを改めることにした。動物は物にはではなく、人間の心にもちゃんと答えることができるのだと。

III アカの大旅行

私たちの撮影は順調に進んだ。初秋の海は水温も下がり、潜水による撮影も終わりに近づいた。そろそろ旅立ちの準備をして、次の撮影地に出発しなければならないのだ。

その頃あの犬は、すっかり私たちのスタッフの一員となっていた。アカと名付けられ人間のルールに従って首輪を付けられ、くさりにつながれた。今まで自由の身から、くさりにつながれる身となったが、これから冬に向かって生きていくのは大変だし、野犬狩りという恐ろしい人間の身勝手な行為もある。そう考えると人間に飼われたほうが、アカにとって幸せだと私は思ったかった。しかし本当はどうだったのか20年後の今、アカに思いを巡らすと、そうとも言い切れない気がしている。

アカは車が好きだった。助手席のドアを開けアカを呼ぶとピョンと助手席に乗ってきた。最初は乗り慣れてないため、食べたものを戻すこともあったが次第に慣れた。車が走り出すと左のドアに顔を寄せて、次々に変わる外の景色をじっと見ている。

9月中ばアカとの思い出多い、紀州白浜の海に別かれを告げて次のロケ地、青森県浅虫海岸にある、東北大学浅虫臨海実験所に向かって二人と一匹の長い旅が始まった。昭和41年頃、高速道路の開通ヶ所は名神高速の一部だけで、国道一号線でも未舗装の砂利道の部分もあった。和歌山県から青森県までは、急いでも二泊はしなければならなかった。単調な車の旅もアカが一所だったので退屈はしなかった。車が北上するにつれ気温がだんだんと下がって行った。朝まだ車の中が冷えているとき、助手席のアカを呼ぶと、私の膝にぴったり体を寄せて湯たんぽの代わりになって温めてくれた。アカはとてもおとなしい犬だった、吠えたのを聞いたことはなく、いつも静かに控えめな性質で、私はそのようなアカが好きだった。



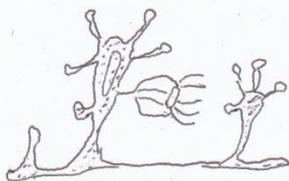
IV やさしい人達との出会い

およそ1600Kmの旅の末、暖かい南の国から、寒い北の国へ二人と一匹はやって来た。東北大学浅虫臨界実験所は、青森市から東へ15Km浅虫湾に面した海辺に建っていた。海上およそ800mに、湯の島が濃い緑を波静かな湾に影を落としていた。実験所から私たちが宿泊した浅虫温泉へは、白い砂浜が弓状に続いていた。

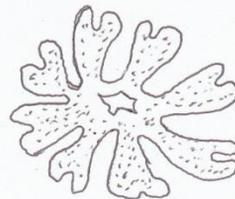
私たち一行が臨海実験所に到着したとき、所長さんを始め研究者の皆さんが出迎えてくれた。私たちの一員に犬のアカが加わっていることを知ると、所長さんが洗面器に暖かい牛乳をたっぷり入れて持って来て、アカにご馳走して下さった。所長さんも官舎で大きな白い老犬を飼っていて、可愛がっている様子だった。

所長さんは東北大学教授、理学博士H先生で、私たちを水槽が並ぶ飼育室に案内して下さいました。腔腸動物の一種、ホヤを飼っている水槽の前に立ったとき、先生はいきなり水槽に手を入れてホヤを取り出し、ナイフで裁いて私たちにホヤをご馳走して下さいました。甘くキュウリのような香りのする、他に類のない味わいだった。私はこの時以来、酒の肴の一番はホヤと決めた。先生は地方紙に「海の生物詩」という題名で海の生き物たちの生態を連載されていた。私は撮影の資料として、それを興味深く読んでいたので、先生に会えてとても嬉しく思った。ミズクラゲの人口飼育を日本で初めて成功させた、K女史も生き物たちに優しい目を向け、私たちに親切に接して下さいました。私たちは、この臨海実験所の動物を愛する暖かな雰囲気の中で、連日連夜35mmカメラによる接写撮影が行われ、北の海に住む腔腸動物の生態が記録されていった。今も心に浮かぶ生き物は、キタカギノテクラゲの虹のように光る傘や、エラコの口に付着したニンギョウヒドラの祈るような姿や、ミズクラゲのポリプが成長してストロビラとなり、桜の花ビラのようにはがれて、一枚一枚泳ぎだしていく幻想的なシーンなどである。

アカは滞在していた旅館の庭につながれ、私が朝夕餌を上げた。そして海岸に散歩につれて行き遊ぶが、こうして松の空に熱かな日を送っていた



◆キタカギノテクラゲのポリプ



◆ミズクラゲのストロビラ

V アカ行方不明になる

秋も深まったある日、息抜きに実験所の皆さんと一緒に奥入瀬方面に紅葉狩りに出かけた。その日は快晴に恵まれ、青空に紅葉が映えて美しく輝いていた。車の好きなアカも一人前に一行の仲間だった。何回かの休憩の時、いつも鎖に繋がれているアカが可愛そうと、紅葉狩りに気を許してアカを鎖から解いた。

アカはブナ林の紅葉の中で、木漏れ日を浴びながら狂ったように駆けまわり、嬉しさを全身で表していたが、次第に私たちから遠ざかっていった。やがていくら呼んでも戻っては来なかった。30分ほど待ったが、どこへ行ったのかついに帰ってこなかった。私たちはあきらめ、予定の紅葉狩りを終えて帰路についたのだった。

私は一足先に宿泊地に帰ってるのではないかと淡い期待を抱いた。道に迷った犬でも帰巢本能があって、遠い所から帰ってくるという話を聞いていたからだ。しかし旅先ではどうなのだろう、宿からアカが行方不明になった奥入瀬途中のブナ林までは、40km以上もあり、しかも深い山中である。不安な気持ちで帰路を急いだ。

その日暗くなってから宿に着いた。やはりアカは帰ってはいなかった。夜の海岸に出てアカ、アカと呼びながら探してみた、姿はなく波音がしじまに消えていくだけだった。

VI 帰巢本能

それからはアカの事が心の片隅にこびりついて、気の重い毎日が続いた。秋も深まって八百屋の店先には、ゆで栗がザルに入れて売られていた。私はこの栗をポケットに入れて海岸を散歩した。そして栗を噛んでその皮を吐き出しながら、アカがもし帰ってきたとき、この栗の皮に浸み込んでいる私の匂いを感じて、この海岸に留まることを願った。

アカが行方不明になってから5日目だった。撮影が一段落した昼休みに、海岸に出て背伸びをした。もうアカのことは半ば諦めていたが、もしやと思い海岸線に目を走らせた。波打ち際のあたりには、死んだ魚や何かの骨が打ち上げられていて、野良犬にとっては良い餌場になっている。だから当時どこの海岸にも野良犬が多いのはそんな理由からなのだろう。その時も野良犬の姿が遠く近くに見えていた。



そんな野良犬の一匹に目が止まった。だいふ離れていたが…アカだ!と直感した。アカも私を見た。目と目が合った。アカは脱兎のごとく駆けよってきた。私はしゃがんだ。アカは私の顔に向かって飛びついて来た。尾を振るわせ、声にならない声で鳴きながら、ところ構わず私の顔を舐め続けた。アカの口はやたら臭かった、腐った魚や汚物を食べていたのだろうか。私はアカのなすがままにしていた。体は痩せ、毛並も乱れていた。どこをほつつき歩いていたのだろうか。40kmの山道をどうやって帰ってきたのだろうか…私はアカをつれて深い感動で心をふるわせながら、宿に戻った。

その後アカを、心配を掛けた実験所の皆さんに見せに連れて行った。皆さんは心から喜んでくれた。そして到着した時と同じように 所長さんから、牛乳をたっぷり頂いた。アカはそれをほとんど息もつかない様子で飲み干した。

青森湾に雪がちらつく頃、私たちはアカと一緒に、撮影済の長いフィルムと、親切な人々との交流の思いを胸に帰路についた。ハンドルを握りながらアカが帰ってきてくれて本当によかった、と感謝の気持ちに浸った。時々助手席のアカの頭に手を置いて一路国道4号線を東京に向かった。

VII そして今

私はその頃、横浜の海岸通りにある単身者用公団住宅に住んでいた。だからアカを飼うことはできなかった。そのためアカは師匠である叔父の一家（神奈川県秦野市）に飼われて、家族みんなに可愛がられていた。私がたまに遊びに行くと、私を忘れずにいてくれた。みちのくの山中に迷ってやっと帰って来た時のように、私の顔に飛びついて舐めた。

アカはその後、子犬を産み数年幸せな日々を送った。しかし家の人鎖を解いたとき、そのまま二三日どこかえ行ってしまった。やはり生まれつき自由な野生の心に従ったのだろう。帰ってきた時には野ネズミ駆除の毒ダンゴを食べたらしく、獣医に見せて介抱したが、その甲斐もなく命を落としてしまった。

あれから早くも20年、私は一家の主となって妻子と共に秦野に住んでいる。今年の秋、ペットショップでアカに良く似た子犬を見つけ、衝動買いしてしまった。茶ップリンと名づけた。散歩をさせながら、紀州白浜で出会ったアカのことを思う。優しい人々のことを思う。今は亡きH先生のことを思う。そして動物の真心を教えてくれた、アカのことを私は一生、決して忘れないだろう。